

# Globe Shakespeare Quotations

◆ Edited By ◆

YOSHIO ARAI

*With*

MAKOTO OZAKI, TAKAYASU FUJIMOTO  
HIDEYUKI SHIMIZU, MAKOTO FURUSHO  
TATSUYA SENUMA AND TAKASHI SASAKI

Asahi Press

音声ファイルの無料ダウンロード



<http://text.asahipress.com/free/english>

この教科書の音声データは、上記アドレスから  
無料でダウンロードできます。

音声教材は下記の人々の提供および協力によるものです。

#### Acknowledgements

Sir John Gielgud (Former Honorary President of Shakespeare's Globe)

Sam Wanamaker (Founder of Shakespeare's Globe)

Dr. Roger Manvell (Former Director of the Audio-Visual Archive at  
Shakespeare's Globe)

---

#### Japanese Shakespeare Players

S. Sato

Hideyuki Shimizu

Toshimi Mizutani

Kaori Edo

Tatsuya Senuma

#### Sazanka Club Public Reading Members

Fumi Hironaka

Nobuko Saionji

Mayumi Yoshizumi

Keiko Sekine

Masako Futamura

and

Yoshio Arai (Editor in Chief)

写真提供

古庄信 荒井良雄

## まえがき

日本人は、古代から、大自然の脅威と恩恵のもとで、『万葉集』以来、自然への愛と人生の喜怒哀楽を詩歌で歌い続けていた。そこへ明治維新が起こって、西欧文明が日本古来の文化に合流し、キリスト教の英語文化を代表するシェイクスピア全集が、坪内逍遙によって全訳された。逍遙没後の昭和10年代には、中野好夫や三神黙などが名作を訳し、戦後は木下順二に続いて、福田恒存の新訳が一時代を画した。昭和50年代には小田島雄志が個人訳全集を完成し、平成になって松岡和子の全訳が完成に近づいている。その間に、安西徹雄や大場建治も名作を訳し、現在では河合祥一郎が翻訳と上演活動を活性化している。

映像化されたシェイクスピア劇も、欧米のような吹き替えでなく、字幕訳に頼って鑑賞してきた。英文なら何でも日本文に直してみせる日本人の能力と技術は驚異的で、日本は翻訳大国にもなっている。西欧文学や東洋文学は言うまでもなく、世界文学の名作のほとんどが、日本語で読めるのだ。

ところが、国際舞台で活躍している経済界や実業家のいびと、外交官や学者や医師たちにとって、日本語のシェイクスピアは、海外において、全く用をなさない。

英会話や資格取得のために検定試験が全盛の日本における英語教育は、“Hello! Goodbye!” “Thank you. Sorry.”といったペラペラ日常会話が大流行で、特にバブル崩壊期や団塊世代の人びとには、英語英文学を中心とした教養英語は軽視され、実用英語と称するものが重要視されている。大学英語でも英文学作品を読む授業は僅少になってしまった。しかし、英文学の教養は「心の時代」の国際交流に必修である。

このたび、英文学を英語で学び、英語を覚えて使う教育を受けた世代で、それを今でも実践している教師が協力して、「シェイクスピアはせめてこれだけでも！」という思いで、このテキストを編集した。読み方、使い方、覚え方は、先生や学生の工夫次第である。

“To be (an internationalist), or not to be, that is the question.”

シェイクスピアの名句を暗誦し、活用して、教養豊かな国際人になっていただきたい。

2012年4月23日

荒井良雄

## ■このテキストについて

---

### (1) テキスト

*The Riverside Shakespeare* (Second Edition, 1997) に準拠し、その注釈を優先して、このシェイクスピア百科を兼ねる一冊本を一人で使いこなせるようになるのを最終目標に置いて編集した。その夢と希望の実現への第一歩が、この名せりふ集である。

音声資料を付けたため、坪内逍遙から今日まで、テキストの行数のよりどころとなってきたThe Globe Editionと、戦後から広く使われるようになったThe Alexander Editionによって、校訂を加えた。したがって、このテキストは、朝日出版社独自のテキストであると言える。

厳密なテキスト校訂学 (Textual Criticism) による独自の編集方針で出版したのが、研究社版の大場建治訳注「対訳・注解シェイクスピア選集」10巻である。大修館のシェイクスピア双書は対注形式で12巻である。この名せりふ集で、シェイクスピア英語の豊かな表現力や作品の楽しさ、思想や主題の魅力に取りつかれたら、好きな作品を選んで、研究社版や大修館版で、シェイクスピアを原文で読む面白さと喜びを味わっていただきたい。

まだ原文が手におえないと思う人は、舞台で上演された名訳を文庫本で一冊一冊読み進めて、訳文の面白さを楽しみながら、自分の訳を作って、朗読してみるのもいい。岩波文庫、新潮文庫、角川文庫、河出文庫、ちくま文庫などがあり、全訳分冊本は白水社版、小田島雄志のuブックスなどがある。その先には英米の原書が数限りなくあって、代表的なシリーズは、Penguin版とArden版である。特にArden *Shakespeare*の分冊本は注釈が便利で評価が高い。

辞典には、*Shakespeare-Lexicon* (Schmidt 編) や *Shakespeare Glossary* (Onions編) の二大古典辞典と *The Oxford English Dictionary* (OED) に加えて、David Crystal & Ben Crystal共編の *Shakespeare's Words* (Penguin, 2002) があり、特にクリスタルのペンギン版をおすすめしたい。必備の廉価版である。

翻訳は、現代劇としてのシェイクスピア全集の全訳者である小田島雄志先生の許可を得て、上演で最も多く使われてきたリズムがよくて板に乗る名訳を使わせていただいた。ここに特記して感謝したい。

---

## (2) 使い方

All the world's a stage,  
and all the men and women merely players.

この世界はすべてこれ一つの舞台、  
人間は男女を問わずすべてこれ役者にすぎぬ。

シェイクスピアを研究するには、原書でも翻訳でも、ありとあらゆる資料が揃っているから、研究者も学生も、選んで使うだけである。選び方と使い方の上手下手で大差がつく。そこで先生の存在が重要になる。

教室でシェイクスピアをテキストに使う時は、先生が演出家 (director)、学生が役者 (players) になって、それぞれの役を演じて楽しむのが一番である。先生も役者になって、学生と一緒に演じたり朗読したりすると、教室が舞台になる。

学生は演出家先生に従って、台詞を覚え、名句を朗読して楽しんでいただきたい。

翻訳に興味のある人は、注釈や先行訳を参考にして、自分の訳を作って、朗読したり演じたりしてみるのもいい。

英文の注釈を、英和辞典で引いて、翻訳では伝えにくい英語の意味を探り、自分なりの訳を作ってみるのも、英語の勉強になる。

名句から作品へ、そして自分の感想文からレポートや論文へ、このテキストの先にはシェイクスピアの豊かな英語と英語文化の世界が広がっている。



# Contents

まえがき .....	3
このテキストについて .....	4

## Prologue

9

## PART I Seven Ages of Man

13

1 All the World's a Stage .....	14
2 Infants .....	18
3 Schoolboys .....	22
4 Lovers .....	24
5 Soldiers .....	26
6 Justice vs. Mercy .....	30
7 Humour .....	34
8 Death .....	38
9 Nothing .....	40

## PART II Shakespeare Theatre

43

1 Shakespeare's Globe .....	44
2 Speak the Speech .....	48
3 Speech (1) .....	54
4 Speech (2) .....	58
5 What is a Man? .....	62
6 Nature .....	66
7 Universe .....	70
8 Love .....	74
9 To be, or not to be .....	78
10 Enlightenment .....	82
11 Elegy (Swan Song) .....	84

## PART III Shakespeare Songs

89

1 Under the Greenwood Tree .....	90
2 O Mistress Mine .....	92
3 It was a Lover and his Lass .....	94

<b>4</b>	Who is Sylvia?.....	96
<b>5</b>	How should I your True Love know? .....	98
<b>6</b>	Tomorrow is St. Valentine's Day .....	100
<b>7</b>	O Willo, Willo, Willo.....	102
<b>8</b>	Come Away, Death .....	104
<b>9</b>	Feste's Song .....	106

#### PART IV Shakespeare's Sonnets

113

<b>1</b>	Sonnet No. 18 .....	114
<b>2</b>	Sonnet No. 29 .....	116
<b>3</b>	Sonnet No. 30 .....	118
<b>4</b>	Sonnet No. 33 .....	120
<b>5</b>	Sonnet No. 60 .....	122
<b>6</b>	Sonnet No. 105 .....	124

#### PART V Brief Shakespeare Lines

127

#### PART VI Shakespeare Memorandum

141

<b>1</b>	シェイクスピアの英語.....	142
<b>2</b>	シェイクスピアの劇 .....	144
<b>3</b>	シェイクスピア関連年表.....	146
<b>4</b>	重要項目 .....	147
<b>5</b>	参考書目 .....	150
<b>6</b>	インド・ヨーロッパ言語系図 .....	153
<b>7</b>	地球語としての英語 .....	154

#### PART VII Japanese University Shakespeare Productions 155

#### Epilogue

167

あとがき .....	172
------------	-----

*Hamlet*

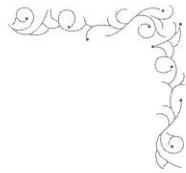
31

CD

- To be, or not to be, that is the question:  
 Whether 'tis nobler in the mind to suffer  
 The slings and arrows of outrageous fortune,  
 Or to take arms against a sea of troubles,  
 5 And by opposing end them? To die: to sleep;  
 No more; and by a sleep to say we end  
 The heart-ache and the thousand natural shocks  
 That flesh is heir to, 'tis a consummation  
 Devoutly to be wish'd. To die, to sleep;  
 10 To sleep: perchance to dream: ay, there's the rub;  
 For in that sleep of death what dreams may come  
 When we have shuffled off this mortal coil,  
 Must give us pause. there's the respect  
 That makes calamity of so long life;  
 15 For who would bear the whips and scorns of time,  
 The oppressor's wrong, the proud man's contumely,  
 The pangs of despis'd love, the law's delay,

## Notes

- [1] **To be, or not to be:** Whether to be, or not to be. i. e. Shall I endure my sorrow or shall I take my own life? ([2-4] の Whether...or... で具体的に To be, or not to be の内容が説明される)。[2] **suffer:** endure patiently. [3] **slings:** 「古代の攻城用投石器」 [6] **to say:** suppose. [7] **natural:** subject to, or caused by, the laws of nature. [8] **is heir to:** inherit. consummation: completion, end.



## ||| 訳 |||

### ハムレット

この今までいいのか、いけないのか、それが問題だ。  
どちらがりっぱな生き方か、このまま心のうちに  
暴虐な運命の矢弾をじっと耐えしのぶことか、  
それとも寄せくる怒濤の苦難に敢然と立ちむかい、  
闘ってそれに終止符を打つことか。死ぬ、眠る、  
それだけだ。眠ることによって終止符はうてる、  
心の悩みにも、肉体につきまとう  
かずかずの苦しみにも。それこそ願ってもない  
終わりではないか。死ぬ、眠る、  
眠る、おそらくは夢を見る。そこだ、つまずくのは。  
この世のわずらいからかろうじてのがれ、  
永の眠りにつき、そこでどんな夢を見る？  
それがあるからためらうのだ、それを思うから  
苦しい人生をいつまでも長びかすのだ。  
でなければだれががまんするか、世間の鞭うつ非難、  
権力者の無法な行為、おごるものの侮蔑、  
さげすまれた恋の痛み、裁判のひきのばし、

---

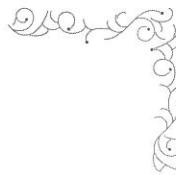
[9] **Devoutly:** earnestly. [10] **rub:** obstacle. [12] **shuffled off:** free ourselves from. **this mortal coil:** the turmoil of this mortal life. [13] **give us pause:** cause us to hesitate. **respect:** consideration. [14] **of so long life:** so enduring and long-lived. [15] **time:** the times, the world. [16] **contumely:** contempt. [17] **despis'd love:** 「失恋」 despis'd: unprised, slighted.

The insolence of office, and the spurns  
That patient merit of the unworthy takes,  
20 When he himself might his quietus make  
With a bare bodkin? who would fardels bear,  
To grunt and sweat under a weary life,  
But that the dread of something after death,  
The undiscover'd country from whose bourn  
25 No traveller returns, puzzles the will,  
And makes us rather bear those ills we have  
Than fly to others that we know not of?  
Thus conscience does make cowards of us all;  
And thus the native hue of resolution  
30 Is sicklied o'er with the pale cast of thought,  
And enterprises of great pitch and moment  
With this regard their currents turn awry,  
And lose the name of action.

—*Hamlet*, III. i. 56-88

---

[19] **That patient merit of the unworthy takes:** That men of merit have patiently to endure at the hands of those who have no claim to respect. merit of の of=from. [20] **might his quietus make:** might give himself his release from life's troubles quietus: discharge or release from life. [21] **a bare bodkin:** mere dagger. **fardels:** burdens. [23] **But that:** unless. [24] **undiscover'd:** not disclosed to knowledge; about which men have no information. **bourn:** boundary. i. e. region. [25] **puzzles:** paralyses. (主語は The undiscover'd country) [28] **conscience:** reflection (but, with some of the modern sense, too) [29] **native hue:** natural (ruddy) complexion. [30] **sicklied o'er:** covered with sickly tint. **pale cast:** pallor (『蒼白な顔色』). [31] **pitch and moment:** height (loftiness) and importance. [32] **With this regard:** on account of this. **their currents turn awry:** turn away their courses.



役人どもの横柄さ、りっぱな人物が  
くだらぬやつ相手にじっとしのぶ屈辱、  
このような重荷をだれががまんするか、この世から  
短剣のただ一突きでのがれるができるのに。  
つらい人生をうめきながら汗水流して歩むのも、  
ただ死後にくるものを恐れるためだ。  
死後の世界は未知の国だ、旅立ったものは一人として  
もどったためしがない。それで決心がにぶるのだ、  
見も知らぬあの世の苦労に飛びこむよりは、  
慣れたこの世のわざらいをがまんしようと思うのだ。  
このようにもの思う心がわれわれを臆病にする、  
このように決意のもって生まれた血の色が  
分別の病み蒼ざめた塗料にぬりつぶされる、  
そして、生死にかかわるほどの大事業も  
そのためにいつしか進むべき道を失い、  
行動をおこすにいたらず終わる。

## ■解説■

この最も有名な独白 (soliloquy, monologue) は、舞台に一人残った登場人物 (Hamlet) が、自分の内心（考えていること）を観客に告白するという約束事で、映画「ハムレット」(1948) ではOlivierのハムレットの頭のクロースアップの映像が使われた。人生最大の難問の一つは、死の恐怖にどう対処するかで、ハムレットは劇の中間で決断に迷うが、最後にはThe readiness is all. Let be. という悟り (enlightenment) に達する。“the tragedy of a man who could not make up his mind.” (決断できなかつた男の悲劇) とも見られる。朗読はジョン・ギールグッド。